

続 アフガン・パキスタン国境を行く 30

新谷絏一県議の報告

極端に悪い治安に心痛む

ロヤジルガでの新憲法期待

前回では、今回の視察を通じて戦争の悲惨さについて語ってくれた。現在でもテロ事件が発生するアフガニスタンの現状と展望について、どう考えるのか。

新谷絏一県議 今月七日、アフガン・カブールで自爆テロが起きた。十数人が負傷し、ドイツ軍兵士四人が死亡したと報じられた。これも国際テロ組織アルカイダの仕業という。カブール入りしての風評では、同時テロ多発事件の首謀者とされるウサマ・ビンラディン氏は死亡しているということであった。しかし、前タリバン政権オマル師は、テロ集団とつながり、堂々と生きているように考える。したがって、世界に広がるイスラム原理主義過激派は、アフガンやパキスタンにあっても活動しており、軍閥や部族、タリバン残党とあいまって、テロは今も頻発しているように、今後まだまだ起こる可能性がある。大きな心配事だ。



アフガン・カブール市内で、診療所に寄贈する救急車と新谷県議

日本の国会に匹敵するアフガンの国民代表者会議(ロヤジルガ)が、昨年六月九日に二十五

年ぶりに開かれ、ちょうど一年が経過した。その決定をみて、首都カブールを中心にアフガン国際治安支援部隊(ISAF)が結成された。内訳は、ドイツやオランダなど二十九カ国四千五百人、別に二十一カ国八千人、そして米軍七千人、アフガン復興自国治安軍三千人、合わせて約二万人が命懸けで治安維持に努力している。しかし、治安は一向によくなる気配はない。極端に悪い治安状態に心を痛め、アフガン二千四百万人の国民が、せめてテロや戦争のない、身の安全が保証される国づくりを強く望みたい。



パキスタン・ペシャワルの難民無料診療所で

日本の繁栄には優れた教育がベースにあった。教育を受けなければならない約五百万人のアフガンの子供たちが平等に学べる環境を一日も早く整備してほしい。ジャララバードで道路の砂利をかき、生活費を稼ぐ子供達の姿が脳裏に焼きついて離れない。教育の対象となる子供たちが少なくとも小学教育だけでも等しく受けられるよう切望してやまない。さらに、はなはだしい男尊女卑や、人権を無視した武力社会に心を痛める。

私たちが訪問中にアフガンの最高意思決定機関、ロヤジルガの研修会が開かれていたが、報道によると、今年十月に新憲法を提案するロヤジルガが開催されるという。直接選挙による

大統領制、二院議会制、三権分立を原則とし共和制、民主主義の導入、国家の独立、信教の自由男女同権、教育の権利などが新憲法の骨子だという。イスラム国家を宣言し、法律に定めないものはイスラム法(シャリーア)を適用する。私たちが視察で、肌で感じたアフガン復興条件が盛り込まれている。十月のロヤジルガをぜひ成功させたいし、アフガン国民のために制定しなければならない。

聞くとところによると、二回訪れたパキスタン・ペシャワルの「アフガン難民カチャガリキャンプ」が間もなく封鎖されるそうだ。昨年一月、パキスタン北西辺境州フセイン・シャー知事との面談で、アフガン難民により、パキスタン市民の職が脅かされたり、地元の人々の負担が大きいと困っておられたが、ジャララバード市やカブールの実態を知った私には難民キャンプの方がまだ暮らしやすいのではないかと思った。

アフガン・パキスタンでは、その地域、そこに住む人々の団結や助け合い、部族や家族の絆(きずな)、たくましく生きていく力など日本人に薄れつつあるものを私に教えてくれた。今ただちに食べるものがない。食糧や生活に必要な物の大切さが心にしみた。バブル時代より身についた使い捨て、子供には不自由させたくない親心からの盲愛、農耕民族として引き継いだ田畑や農地開発事業で整備された優良農地ですら遊休・荒廃している実態。しかも、わが国の食糧自給率は約 40%であり、食糧の 60%を海外に依存しているにもかかわらず、今でも飽食を謳歌(おうか)する日本人。景気の動向や世情とあわせて心配の種は尽きない。そのようなこ

とを考えさせられた今回の視察は私にとって意義は大きかった。

= 随時掲載